

歪みの狭間

成平 いちへいた
一平太

「主文、被告を死刑に処す」

地面を叩くかのように激しく降る雨の音が第二法廷の傍聴席からも微かに聞き取れる。

六月の空気は一年を通じてもっとも重い。その重い空気よりもさらに重い裁判長の声が殺人の罪に問われた斧寺広太の胸のつかえを降ろした。

広太は両親に二歳違いの兄と年子の妹とともに何かに不自由することもなく育てられた。しかし、広太の心に潜む歪みの狭間が切り裂かれ辺りを赤色に染めた。

「どうしてあの広太君が・・・」

「なぜ、なにがあつたの？」

近所の誰もが耳を疑うかのような悲惨な事件が起つて丁度二年の月日が流れた。広太の父親、朝一は傍聴席の一番前に席をとり、広太の背中に詫びるかのような視線を投げかけながら裁判長が読み上げる判決文に心を痛めた。

事件が起きた日、斧寺家の誰もが朝早くから浮足立っていた。広太が見始めた結婚相手の滝本由美子が挨

拶にやつてくるからだつた。朝一も佳子もこの日がくることを誰よりも願つていた。にもかかわらずこの日が斧寺家にとつて終幕の切つ掛けとなつた。惨事の火種は、広太が衝動的な行動を起こす一箇月前にあつたいや、本当は朝一が佳子を見初めた時から始まつていたのかもしれない。

斧寺朝一は東京の大学を卒業し、大手ゼネコンに就職した。規律と体力とが重んじられた二週間ほどの研修を朝一は無事に終えることができた。総合職で採用された多くは、全国の支店や営業所への配属となつた。が、朝一は違つた。本社第一営業部に配属となり、サラリーマン人生において恵まれたスタートを切つた。入社試験での成績と研修中における機敏性とリーダーとしての素質を買われての配属だつた。

競争心の旺盛な朝一は、上司にも恵まれ営業のイロハを徹底的に仕込まれた。朝一の吸収力の良さとバイタリティは、上司の好奇心をも搔き立てた。そしてその指導振りは厳しさに輪をかけるものがあつた。その甲斐があつてか、国土交通省を始め各省庁はもとより関東圏における各官庁にも積極的に出入りできる度胸を朝一は磨くことができた。そしてその積極性をもつ

て各省庁とのパイプを作り上げることに心血を注いだ。

特に将来における有望性のある若手の役人を見分ける力は群を抜いていた。そしてそれを営業業績へと結びつける手腕においては右に出るものはいなかつた。業績の振るわないものや何かの不都合がおきればすぐに地方に飛ばされる。そんな社風の中につて朝一は、本社営業部の本流から一度も外れることなく出世の階段を駆け上がつていた。

朝一は、入社七年目にしてだれよりも早く第一営業部の係長に抜擢された。同時に、国土交通省総務部の事務官であつた二十七歳の佳子と結婚をした。

佳子は、会津の高校を出ると公務員試験をトップの成績でパスし、国土交通省に事務官として採用となつた。高校の担任は佳子に大学への進学を勧めたが、女手一つでこれまで育ててくれた母親を樂にしてやりたいとの思いから就職への道を選択したのだつた。

佳子の戸籍の父親欄には何も書かれてはいなかつた。その理由も、父親がどうしたのかも佳子は母に尋ねることはなかつた。聞いてはいけないことだと自分に言ひ聞かせてきた。母親譲りの人並み以上の容姿と成績がかえつて佳子を孤独にさせ、母子家庭のハンディを乗り切るには強い意思と意地が必要だつた。それは社

会に出てからも何ら変わることはなかつた。

キャリア組の何人かが佳子の容姿を見初め近寄つてはきたが、佳子の父親のことを知ると出世に影響するとばかりに遠ざかつていった。

そんな中にあつて朝一は、国土交通省を訪問するたびに佳子の存在を強く意識することとなつた。

「こんど一緒に食事でもしませんか？」

朝一は思い切つて佳子に声を掛けた。

「お仕事が忙しいんじゃありません？」

佳子にも朝一の仕事振りが耳に届いていた。国家公務員という温室の中では外の世界との戦いは皆無に近い。それとは、眞逆の世界に生きる朝一。社内における出世競争のためには他社との競争に勝ち抜くことが前提条件となるゼネコン。戦うための朝一の骨格は佳子の周りの男たちのそれとは歴然とした違いがあつた。

戸籍における父親欄が空白だつた佳子は、言い難い幾多の試練に耐えながらこれまでやつてきた思いだつた。世間並みの結婚さえ望むには大きなハンディにもなりえる空欄。佳子が人並みの容姿ならば声を掛ける男はいなかつたのかもしれない。

半年ほどの交際を経て朝一と佳子は婚約をした。朝一の両親は佳子が私生児として育つたことに難色を示

したが、霞が関に勤めていることが幸いした。数年後には同居するとの条件つきではあつたが無事に結婚式を挙げる事ができた。もっとも佳子側に親族の出席はなく、役所の関係と数人の女友だちだけが新婦側の席を埋めた。斧寺家の長男でもある朝一側の招待客には多くの親族、仕事関係、友人らが招かれた。それでも佳子の母親は気後れすることなく朝一の両親に深々と頭を下げ、佳子の幸せを願つた。朝一の両親は笑顔で挨拶を受けながらも、佳子の親族が招かれていないと訝つた。

新婚生活は葛西の小さな賃貸マンションで始まつた。一人娘を無事に嫁に出した佳子の母は、独り静かに暮らしたいと会津を離れようとはしなかつた。これまでにも佳子は何度となく父親のことを母に尋ねようと嘆いた。不思議なことに佳子の節目、節目で地元の大物政治家の名前が耳元に残つた。

佳子の母は小さな町工場の事務員として働いているが、佳子が産まれる以前は一流料亭の仲居をしていたと母から聞いていた。事務員の給与はけして多くはない。小さな借家住まいの母子にお金の余裕などはあるはずもない。頼れる親戚もない。それでも佳子が小学

校に上がる時には、上物の赤いランドセルを背負うことができた。自分専用の勉強机など持つている同級生などはクラスの半分にも満たない。それでも佳子には立派すぎるほどの勉強机があてがわれた。中学校、高校等学校と上がるたびに真新しい制服と鞄。高校生ともなれば靴も鞄も革でできていた。

何度も大臣を経験している大物政治家がお国入りをする度に佳子の母は仕事を休んだ。高校出の田舎者がいくら公務員試験の成績が良かつたからといって霞が関の本省などに勤めができるものなのだろうか。佳子にはなんとなくわかつっていた。それでもそれを口にすることはなかつた。口にすれば、きっと母が困るだろうと佳子なりに察しが付いたからだつた。案の定、結婚式には祝電と共に大きな花束が届いた。

「それにしても大きな花束だつたね。あんな大物どんな付き合いがあるの？」

朝一の仕事には政治家の事務所への名刺配りも重要な位置づけになつていた。

「さあ？　お母さんが後援会の婦人部に入つているからじゃない」

佳子は話題の広がりを嫌つて、適当にその場をごまかした。

結婚を機に朝一の仕事ぶりは多忙を極め、これまでよりもさらに充実したものになつていった。

「佳子、おれは必ずこの会社で這い上がつてみせる」
「そおね。いつか私を重役夫人にしてね」

世間でいうところの甘い新婚生活など二人には無縁に近いものがあつた。佳子は物心が付いた時から常に独り取り残されることに馴れていた。朝一は、仕事絡みの接待が続き、夜の十時前に帰宅することなどない。休日は接待ゴルフの繰り返しどとなつた。佳子も退職することなく、霞が関に通つた。二人が会話する時間は深夜か、朝食時のわずかな時間に限られる日々が続いた。それでも結婚をして二年後に身ごもつた。

「これで独りから開放される」佳子はなによりもこのことが嬉しかつた。

佳子は、育児休暇を選択することなく国土交通省を退官した。朝一は相変わらず仕事没入の毎日が続いた。出産予定日を一箇月後に控え、佳子は里帰りをした。

朝一が独り、トースターに電源を入れ、フライパンに玉子を落としながら脇に置いた朝刊に目を移すと、あの大物政治家が倒れたとの記事が目についた。

翌朝刊には、治療の甲斐もなく他界したとあつた。脳梗塞だつたらしい。葬儀は盛大に行われるだろう。

朝一は、早速に情報を集めた。葬儀には必ず多くの政治家や名だたる企業の代表者が焼香にやつてくる。朝一の会社も社長自ら弔問することになつた。しきびに花輪、弔電の手配も怠りはない。地元で密葬を行い、荼毘に付してから改めて東京で告別式を行うことになつた。朝一は、会津に向かつた。

密葬とはいえ地元の名士。市長を始め多くの弔問客が寺の境内を行き来した。

「お義母さん」

朝一は、影をひそめるかのように銀杏の大木の脇から本堂に飾られた遺影に手を合わせる佳子の母の背中に小さく声を掛けた。

「朝一さん」

佳子の母は朝一の姿に驚きを隠さなかつた。

「後援会の婦人部の皆さんお手伝いで大変なのでは？」

「私はいいの。佳子のこともあるしこれで帰るわ。朝一さん、今夜は家にいらしてね」

その晩、朝一は久し振りに佳子の大きなお腹に笑顔を重ねた。

無事に出産を終えた佳子。初孫を愛しくあやす佳子の母。知らせを受けた朝一は、長男の誕生を歓び朝哉ともなりと

名付けた。

産後の肥立ちも良く、二週間ほどで葛西のマンションに佳子は朝哉と共に戻った。知らせを受けた朝一の両親もマンションに駆けつけ、朝哉に頬ずりをくりかえした。

「朝一、朝哉も産まれ佳子さんも子育てになにかと手が掛かる。そろそろ、こちらに越してこないか」

結婚をするにあたつての約束事だった両親との同居の話が持ち出された。

「わかっている。佳子も承知している」

朝一は佳子次第だと思ったが、その時には口に出さなかつた。

それから三箇月ほどして佳子の母に異変が起きた。

臍臓に癌が見つかつたとのことだつた。発見が遅く、すでにリンパにまで転移していることがわかつた。独りしかいないう身寄りの佳子に病院から連絡が入つた。医者の説明では余命三箇月とのことだつた。佳子は母を説得し、直ぐさま東京の病院での治療に切り換えた。母に残されたわずかな時間。佳子は毎日のように母を見舞つた。

「佳子、あちらのお義母さんとうまくやるのよ。お姑さんの言うことは絶対だからね。朝一さん佳子をよろ

しくお願ひします」

佳子の母の最後はあつけなかつた。佳子は、慎ましやかな葬儀を済ませ会津に葬つた。

朝一の両親との同居は佳子にとつて最悪の状態の日々となつた。朝哉の育児は佳子が独り負うこととあつて、朝一は相変わらずなにことにも仕事が優先された。結果として朝哉の育児は佳子が独り負うこととなつた。ましてや佳子と姑との揉め事に朝一が関わることもなく、佳子は何かにつけて独りで解決して行くしかなかつた。

「佳子さん、あなたは朝哉の育児のみしていればいいというわけではないのよ。斧寺家の嫁としてももう少しわきまえてくれなければ」

佳子には、義母の言つている意味がわからなかつた。朝哉をあやしながら戸惑う佳子に義母からの苦言はさらにつづいた。どうやら訪ねてきた親族への挨拶が嫁としてできていないと言つているらしい。

佳子に溜まるストレスは朝哉を溺愛することで紛らわされていた。そして時には夜遅く帰宅する朝一にも愚痴をこぼすことがあつた。ときには顔色を変えて朝一に救いを求めてくることもあつた。朝一もその都度、聞き役に徹してはいるのだが、決まって佳子の話は支

離滅裂といつても過言ではなかつた。佳子のストレスはそのまま朝一のストレスとなつた。休日になれば佳

子と母との板挟みになることは目に見えていた。朝一は日曜日にもかかわらず接待と称してゴルフバッグを抱えて朝早く妻の佳子の見送りを背に受けながら家を出た。これまでも会社の休みの多くは接待と称して出掛けた事が多かつた。大手ゼネコンの営業部長ともなれば国土交通省の役員だけに留まる事はなく、多くの政治家が接待の相手となつた。ましてや取締役の椅子にもつとも近い本社営業のトップともなれば全国の市町村の役人、さらには地方議員までもが接待の対象となつた。しかし、その日については接待などではなく朝一は家族のしがらみから逃げ出すためにゴルフバッグを肩に担いだにすぎなかつた。

「あなた、もう無理。気がおかしくなりそう。私はこの家を出ます」

帰宅した朝一を待ち構えていたかのよう佳子は涙ながらに訴えた。佳子の話では、「朝哉との接し方が教育によくない。甘やかすだけでなく朝哉の心を育むよう。いつまでも母乳をあたえていいで離乳食に切り換えなさい。そろそろ赤ちゃん言葉はやめなさい。それはだめ、これもだめ。斧寺の家を継ぐ子なのよ」

と毎日のように干渉され、これ以上は耐えられないことだつた。

その夜は、朝一がなんとか佳子をなだめ、事なきを得たが二人目の子供を佳子が宿すと、佳子はヒステリックになつた。

「お義母さん、いい加減にしてください。朝哉は、誰よりも優秀な子です。聞き分けもいいしお返事だつて」「そうですか、私はもう何も言いません。佳子さんのいいようにしてください」

二歳の誕生日を超えたばかりの朝哉に佳子は英才教育とばかりに幼児向け教材を買い込み、嫌がる朝哉を相手に口うるさく教え込んでいた。見かねた義母は、「まだ早いわよ。今は心を育むのが先よ。何にでも目を輝かせて興味を持とうとしている時に強要はよくないわよ」と言つては、朝哉を散歩に連れ出し、花や虫や犬、猫、鳥を指さしては朝哉に優しく語りかけていた。

それほどにそりの合わない義母ではあつても、出産時には手を借りなければならぬ。佳子は頭を下げて朝哉を義母に預け、広太を産んだ。そしてその数箇月後に佳子は、三人目を身ごもつていてもかかわらず江戸川を越えてアパートを借りた。朝一も佳子に押さ

れるままにこれに従うしかなかつた。

さらに半年が過ぎて長女の里香子を佳子は出産した。

この時も朝哉と広太は朝一の両親に預けるしか頼るあてはなかつた。そして、その交渉はすべて朝一がすることになつた。

「あなたは困つた時だけ私たちを頼るのね」

「ごめん、かあさん。三週間だけ」

朝一は、懸命に頭を下げた。なにがあろうと朝哉と

広太が可愛い孫であることに違いはない。

「いいわよ。こまつた時だけでなく時には顔を出すのよ」

の数日と正月三が日だけではあっても傍目には幸せな家族に見えた。

「あなた、朝哉は来年の春には中学に上がりります。せめて小学生の間に家族旅行の想い出を作つてやれませんか?」

佳子は、冷えた夕食を温め直しながら朝一に懇願するかのような視線を投げた。

「わかった。なんとかする」

朝一は、夏休みをいつもより二日余分に取つた。

「えっ、キャンプ?」

「どこに?」

「いつ?」

佳子から聞いた子供たちは目を輝かせはしゃぎ廻つた。

奥多摩湖のほとりにテントを張るのは朝一と朝哉の役割になつた。大きめの石を集めでのかまどは広太が作り、小枝集めは佳子と里香子が担当した。

立ち込める煙に涙を流しながら広太が奮闘する。じやがいもと人参に危なつかしい手つきで里香子が包丁を入れる。飯盒の尻に薪の炎が頃よく当たるように気づかう朝哉。朝一はしきりにシャッター音を飛ばし、佳子は微笑みながら子供たちをじつと見守つた。

芯の残る硬めの飯。不揃いなじやがいもや人参がグツグツと音を立てる。これまでに味わったことがないほどに美味しいカレーを誰もが笑い声とともに腹一杯に堪能した。

朝一の家族にとつて唯一の楽しい想い出となつた奥多摩湖畔のキャンプを境に、朝一は前よりも増して仕事に没頭した。朝哉が大学を卒業するころには朝一の名刺には第一営業部長と記されたその上に、執行取締役の肩書が付いた。あと数年もすれば取締役常務となるのは既成事実と思われていた。そんな矢先に斧寺家に異変がおきた。朝哉が社会の厳しさについてゆくことができずに、閉じ籠もり状態となつたのだった。有名進学高校を難なくパスし、一流大学を優秀な成績で卒業し、大手商社に就職できたものの、一年あまりで辞めたいと言い出した。佳子は目を潤ませながら朝哉を説得したが朝哉は首を横に振るばかりだつた。

朝哉の無断欠勤は一箇月あまり続いた。佳子は何があつたのかと朝哉の上司を訪ねた。

「お母さん、朝哉君は会社勤めに向いていないように思えます」

「そんなことはありません。朝哉は大学もトップクラ

スの成績で卒業しました。高校の同級生には医師や弁護士を目指している子も大勢います。あの子は誰よりも優秀な子です」

「お母さんが言われるよう朝哉君は優秀なのかもしれません。お友達も優秀な方が多いのでしよう。しかし、我が社の仕事には向いていないよう思います」「会社側の思い込みが朝哉を追い詰めているのでは?まさかいじめがあると言うことはないですよね」

「お母さん、朝哉君は立派な大人です。まずは彼自身が出社して事情を説明するのが先決かと思いますが・・・」

押し問答が続いた。

「とにかくお母さん、朝哉君に明日は出社するよう伝えください」

明らかに上司の顔には苦渋の色が滲み出でていた。

その夜、佳子は朝一に朝哉が会社にもいかずに引きこもつていることを話した。朝一には何が起きているのかが理解できなかつた。朝一が会社の上司の立場なら問答無用で朝哉を切り捨てているに違ひない。寝ている朝哉を無理やり起こし、朝一が聞いたが支離滅裂で要領がえないので、心が病んでいるように見えれる。生きるための競争をする必要もない学友や家族と

は何ら差し支えることなくコミュニケーションが取れても社会に順応できていなかのように朝一には見えた。

統合失調症、朝哉につけられた病名であつた。医師の診断では、本人の気の持ちようでもあり家族がケア一するしかないとのことだった。精神安定剤とともにカウンセリングを時折受けることを勧められた。そのころ広太は厚木の大学へ、里香子は横浜の短大生だつた。それぞれが自宅から通うのは面倒とばかりに下宿生活をしていたが朝一に言われ自宅通学に変わった。朝哉を常に家族が囲む生活をすることで朝哉の心の改善を願つた。広太も里香子も兄のためと電車通学に切り換えた。

「朝哉、あなたは私の子よ。誰よりも優秀なのよ。今は世の中が狂つていいだけよ。必ず朝哉の力が必要とされる時がくるわ」

佳子は、自室にこもる朝哉に毎日のように語りかけたが、病状に改善の兆しは見られなかつた。

広太も里香子も大学を卒業し、自宅から通える範囲に就職をした。朝一もこのころには、仕事一辺倒から家庭に重きをおくようになつていた。と同時に本社営業部の本流から外され、これまでと違つて都心とは反

対方向に一時間以上も電車に揺られる支店勤務となつた。

朝哉の引きこもりが解消されないまま、広太が大学を卒業して六年。

「どうして俺の周りはこうもバカばかりなんだ？」

広太は職を変えるたびに口にした。

「広太、あなたが優秀すぎるのよ。今にあなたに見合う仕事がやつてくるわよ」

そんな広太を佳子はいつも同調するかのよう擁護していた。しかし、里香子だけは違つた。

「お母さん。お母さんはお兄ちゃんたちを庇いすぎよ。お兄ちゃんたちは弱すぎるのよ。お兄ちゃんたちよりも優秀な人は五万といいるわ」

「里香子」

佳子の顔色が変わると同時に大きな声が家の中に響いた。威圧するかのよう佳子の声などこれまでに聞いたことのない兄弟。朝哉は部屋の隅に背中を丸め頭を抱え込んで怯えた。広太の顔も血の気が引いている。

「お母さん。私、近い内にアパートを見つけてこの家を出てゆくからね。ここにいたら私まで負け犬になりそうなの」

里香子は、意を決したかのように口にした。佳子の

長兄を気づかつての提案から七年が過ぎていた。朝哉の心の病は一向によくなる兆しをみせない。いや、ますます自室にこもることが多くなり、声はおろか顔さえみない日が続いた。里香子にはこの家の空気が耐えられなくなつていた。この空気の色合いを創り出しているのは朝哉よりも佳子の存在が大きいと里香子は気づき始めていたのだ。里香子がアパートを探し始めて三週間が過ぎていた。あとは、口にする切つ掛けを待つていたにすぎなかつた。

佳子の腕のなかで、三人の兄弟は草原を走り回るかのように育つた。怪我をしそうな石や小枝は佳子が見つけるたびに取り払つて。雨が降り出す前に大きな傘を拡げ子供たちを抱えた。冷たい風が吹けば自らの背中で受け、子供たちだけは凍えないようにと立ちはだかつた。佳子が子供のころから願つても叶わなかつたことを朝哉にも広太にも里香子にも味合わせまいと常に子供に寄り添つた。必死に母親役をやつてきたとの自負が佳子にはあつた。モンスター・ペレンツと揶揄されることもあつた。が、佳子は気にすることなく子供たちのことだけを考えてやつてきた。里香子の振舞いはそれらを全否定しているかのように佳子には聞こえた。

「里香子、あなたは親や兄弟を捨てるの？」
「だれもそんなことを言つていわないわよ」
「朝哉は病気なのよ。家族が傍にいてやらないでだれが……」

「とにかく私はこの家を出て行くから。もうアパートだつて決めたし」

次の日曜日に里香子は家を出た。朝一は特に何かを口にすることなく黙つて送り出した。

「あなた、どうして里香子を止めてくれないんですか？　これまで私は必死で子育てをしてきました。子供たちに寂しい思いをさせまいとあなたの分まで……あの子は家族を捨てようとしているんですよ」

佳子は朝一を責めたてた。

「捨てるんじゃない。独り立ちしようとしているんだ」

朝一には里香子がなぜこの家を出る気になつたのかわかるような気がした。いや、この家を出て自立の道を選択することで一人前の女として成長できるような気がした。朝哉の今を創り出したのは朝一にも責任があると考えていた。佳子は、幼くして味わつた寂しさを子供たちにはさせまいと必死にやつてきたに違いない。その結果がどうであろうと朝一にそれを責めることはできない。

里香子が家を出て半年が過ぎ、ひよっこり顔をみせにやつてきた。

「どうだ、独り暮らしは？」

元気にやつているか？」

朝一には心なしか里香子が明るくなつたような気がした。

「ええ、元気よ。朝兄は？」

「あいかわらずだ」

「そう。広兄は？ いまだも派遣？」

「ああ、安月給のうえ不規則な勤務だ」

「今仕事は幾つ目？」

里香子は小さく呟きながら指を折つた。

「私の記憶にあるだけで六つ目。早く正職につかない

と結婚もできないのにね」

「里香子はどうなんだ？」

「何が？」

「結婚だよ。彼氏はいるのか？」

おまえだつていつ結婚したつておかしくない歳だ」

「そうね。男友達なら何人かは。それより今は仕事が

楽しくて」

「そうか。けつこうなことだ」

他愛もない話を一時間ほどして里香子は帰つて行つ

た。玄関先まで見送ろうと思つたのか、朝一は腰を上げ掛けたが思い止まつた。

「生き生きとしているじゃないか、里香子」

一言も口を開こうとしなかつた佳子に、「これで良かつたんだ」と諭すように話しかけたが会話が続くことはなかつた。佳子は未だに里香子を許してはいなかつた。

里香子はその後も三箇月に一度は、ケーキやドーナツをもつては家族の様子を見に来るかのように顔を出すようになつていて。佳子も不機嫌そうな顔をしながらも里香子が持参するケーキを口に運んだ。その様子を見がなら里香子はいつも小さく笑つていた。

「お父さんは？」

「お昼ごはんを食べて、図書館へでかけたわ」

「それより里香子、独り暮らしで家事はきちんとできているの？」

どうやら佳子は、里香子に悪い虫がつきはしまいかと心配しているようであつた。

「料理に掃除、洗濯どれもちゃんとやつているわよ」

「そう、ならないのだけれど・・・。広太が結婚したい女ができるたつて」

「えつ、広兄が結婚？ うつそ」

「嘘つて言い方はないでしょ。広太だつて三十になるのよ」

「で、どんな人？」

「どんなつて、お母さんもまだ会つていないので。来週

の日曜日に連れてくるつて」

「でも広兄、仕事は？」

「今は、A通販で電話の窓口担当らしいわ」

「それつて、正規雇用？」

「派遣社員として採用されてまだ一年。正規の道もあるらしいわよ」

「あいかわらず続かないわね。そんなんじやあ結婚しても生活が成り立たないんじやないの？」

「もちろん、共働きよ。相手は大学を出てからM薬品に勤めてるらしいわ。大学のサークルが一緒だつたら合いをしていたらしいわ。そして一箇月前にプロポーズしたんだつて」

「M薬品って一部上場よ、学卒で八年だと最低でも五百くらいの年収はあるわね」

「そうなの？」

「むりむり、とても信じられない。その人よっぽど結婚に焦つているのね」

「なんてことを。広太は優秀な子よ。お給料が良いくらいなんだつていうの。広太と結婚できるのよ」

「まあ、結婚は本人同士がよければ・・・で、式はいつごろ？」

「それもこんどお見えになつたら大体のところは決めないとね」

「ねえ、私もその人に会つてみたいから参加してもいい？」

「もちろんよ。家族なんだから。でも、参加つて言ひ方はよしなさい」

「元気そうだな」

朝一が、何冊かの本を抱えて帰つてきた。

「元氣よ。それより今、母さんから広兄のこと聞いたわ」

「そうか」

「広兄もついにこの家を出て独立か・・・」

「なにを言つているの。広太は結婚してもこの家にいるわよ。広太にはプロポーズの相談を受けたときに話してあるわ」

「むりむり、相手がうんとはいわないわ」

里香子には確信があつた。佳子とうまを合わせることができる人などいるはずがない。ましてや問題を抱

えた朝哉の存在も障害になると里香子は付け加えた。

「そんなことはないわよ。広太はそのつもりよ」

「相手の人には同居の話がしてあるの？」

「広太には、相手に言う必要はないと言つておいたわ。嫁にくるのよ」

里香子には佳子の口ぶりが、嫁ならば斧寺の家に黙つて従えばいいと言わんばかりに思えた。

「なにも同居などする必要はない。歳を重ねて同居したいと言えばそれはそれでいい」

朝一にも広太の相手が同居を承諾するはずがないと思えた。

「ありえない。絶対にありえない」

里香子は重ねて口にした。

「あなたたち、家には朝哉がいるのよ。この先のことを考えたら同居してもらうしかないのよ」

「朝哉のことは親のおれたちが責任を持つことであつて広太に押しつけることじやない」

「押しつけるって、そんな言い方は・・・。広太とは兄弟なのよ。弟が病気の兄を思いやつてやらなければ・・・。嫁は黙つて従うものよ」

「とにかく、朝哉はおれたちが元気なうちはともかく改善する様子が診られなければ施設か病院に入れる。

この家を売つてもその費用は工面するしかない」

「そんなことはできません。世間体だつて・・・」

佳子は「子育では私が独りでしてきたのよ。あなたには何もわかつていないので」と、喉元まで出掛けた

がそのまま押し黙つた。

「子供たちはもう大人だ。広太も里香子もそれぞれの人生を歩めばいい。なにもこの家に縛ることはない」

朝一は、「おまえだつて同居を嫌つたじやないか」と言い掛けたが、無理やり呑み込み佳子に諭すように口にした。が、佳子の顔は不満げだった。

日曜日の午後になつて広太は由美子を伴つて斧寺家の門を開けた。佳子は今朝早くから庭先はもちろん、玄関ドアから土間、応接間、台所と念入りに磨き上げた。今日を境に姑として嫁に見せつけておく意地があつた。

応接間のソファーに広太と由美子が並んで座つた。向き合うように朝一と佳子、そして里香子が座つた。朝哉はあいかわらず二階の自室にこもつたままだつた。応接間の由美子以外の誰もが、朝哉が奇声を発するこだけはないようとに願つていた。

「綺麗な顔立ちのお嬢さんね。それに芯もしつかりとしていらっしゃる。広太にはもつたいいくらいなお

嬢さんね』

広太が由美子を紹介し、由美子が挨拶を終えると同時にだれよりも真っ先に佳子が由美子の容姿を讃め称えた。もつとも佳子の目は広太を見据え、「気の強そうな顔立ちだこと。意地つ張りにも見えるわ。広太、この人に負けてはだめよ」と、声に出すことなく投げかけた。もつとも広太に伝わるはずもない佳子の呴きではあつたが、由美子はこれを捕らえていた。由美子は気付かない振りをして、広太と出掛けた幾つかの想い出話をした。他愛もない話で応接間には時々笑い声があがつた。

「それで由美子さん、お式はいつごろのつもりをしているの？　あなたたちのお部屋は西側の八畳間と思っているから……。その前にリフオームをしなければ」佳子は、由美子の顔色を伺いながらさりげなく、同居の話を切り出した。

「えつ。リフオーム？」

由美子は、佳子が口にしたリフオームの意味が理解できなかつたが、口元の筋肉を緩めることでからうじて笑顔を保つた。もつともその緩めた筋肉も一、二秒で傍目にはわからない程度にけいれんを起こしていた。

『由美子さん。俺の給料では生活が大変だし、兄貴の

こともあるからこの家にお嫁さんに来てもらいたいんだ』

由美子の戸惑つている様子に広太は、二人の新しい生活の場をこの家で始めたいと告げた。朝一と里香子は何かを口にするでもなく三人の様子を伺つていた。

『広太君、ご両親と同居するつてこと？　それにお兄さんつてどういうこと？』

由美子の問いかけは優しく語りかけるかのように見えたが、頬紅の下の地肌の色合いが変化しているのを里香子は察知していた。

『おれは今、派遣だから給料が安い。それに兄貴が病気だから』

『大丈夫よ、由美子さん。広太は優秀な子だからいつまでも派遣つてことはないわ。朝哉だつて手がかかるわけじやないし。それより広太、由美子さんのご両親へのご挨拶を早くしないと。私たちとの顔合わせの日取りも決めなくては。ねえ、由美子さん』

『ちょっとまつてください。あまり性急にお話が進んでも……。まずは両親に広太君を紹介しなくては。父や母がなんて言うかもありますし……』

『大丈夫よ。結婚は当人同士が決めることよ。それに広太ならきっと由美子さんのご両親にも気に入つてい

ただけるわ」

由美子が言いたいことは結婚そのものではなく、広太が正規雇用ではないことと同居についてだった。それに加え、病気の朝哉までもが一つ屋根の下で暮らすことに由美子の両親が賛同するはずもないことは容易に察しがついた。由美子は女姉妹の長女だった。

由美子の両親は、二人の娘のどちらも養子を取ることなく嫁に出すと日頃から口していた。由美子には両親の思いは痛いほど理解できていた。三十という年齢になるまでには幾つかの結婚の話が由美子の前を通り過ぎていった。両親のことを考えるとなかなか結婚に踏み切ることができなかつた。次男の広太。大手通販のA社に勤めていれば生活の安定は約束されている。三十歳になつた由美子にはあせりがあったのかもしれない。

「うわー、いい匂い。だあれこの女人人？」

朝哉が応接間のドアを開けて入つて来るや、由美子の顔を除きこむかのように顔中の筋肉を緩め鼻を近づけてきた。由美子は咄嗟に手で朝哉の顔を払いのけようとしたが体をのけぞらすことで必死にそれを耐えた。「朝哉、こちらは滝本由美子さん。広太のお嫁さんになる人」

「お嫁さん？ 広太、お嫁さんをもらうの？」

「そうよ。今、大事なお話をしているから朝哉は自分のお部屋にいつてらっしゃい」

「お嫁さん、お嫁さん。広太が綺麗なお嫁さんをもう。お嫁さん、いいな、いい匂いのお嫁さん、いいな」

朝哉は手をたたき、スキップしながらはしやぎ廻つた。幼い子供なら微笑ましく由美子にも映つたにちがいない。しかし朝哉は三十を過ぎた大人である。W大学を卒業していると広太から由美子は聞いていた。その朝哉が目の前で奇怪な動きをしながら騒いでいる。

「朝哉、さあ二階に行くわよ」

さすがに佳子もまずいと思つたのかソファーから立ち上がると朝哉の手を引いて応接間を出ていった。

「由美子さん、驚いた。朝兄は大学をでて一年ほどお勤めをしたのだけれど突然見た通り幼児帰りしたみたい。お医者様は統合失調症だつて」

里香子が戸惑いをみせる由美子に斧寺家の事情を説明するかのようになりした。

「由美子さん。私は同居などする必要はないと考えている。どこかに部屋を借りて広太と新しい生活をすればいい。ご両親とも良く相談をしていただいた上で、広太と一緒にこれからることは決めていけばいい。今

日のことは少し驚いたかもしないが、私としては良い人」と広太は巡り逢つたと思つています」

朝一の一言で、由美子は救われた思いだつた。このままの状態では腰を上げようにもそのタイミングが図れなかつた。由美子がソファーから立ち上がるとつられたようにそれぞれが腰を上げた。

「あら、もうお帰りなの？ お夕飯でもと思つていたのに」

朝哉を部屋に戻し、帰つてきた佳子はがっかりした様子を滲ませた。

「お母様、今日はありがとうございました。あまり帰りが遅くなると……両親も今日の報告を心待ちしているでしようから」

「そうね。じゃあ、また近いうちにいらしてね」

「母さん、おれ駅まで彼女を送つてくるから」

二人を玄関先まで佳子と朝一が見送つた。応接間に残つた里香子は、手をつけずに残していく佳子のシヨトケーキを口に運んでいた。

「気の強そうなお嬢さんだつたわね。でもまあうまくやつていけるわ」

二人の見送りから戻つた佳子が、テーブルの上に残されたティーカップを片付けながら呟いた。

「お父さんは？」

佳子ひとりが応接間に戻つて來たことを里香子は不思議に思つた。

「コンビニで週刊誌を買つて來るつて」

「そう。今頃、由美子さんと広兄は喧嘩しているわね」

「どういうことよ」

「この結婚は白紙になつたということよ」

「どうしてよ。そりやあ少しは朝哉には驚いたかもしないけれどたいしたことじやあないわよ」

「そうかな、私だつたら絶対にごめんだわ。派遣社員に姑との同居。おまけに精神病の兄貴つきよ」

「なんてことを言うのよ。朝哉は精神病なんかじやないわよ」

里香子の予想通り、斧寺家での出来事に憤慨して小走りの由美子を広太が追いかけるよう歩いていた。

「ちょっと待つてよ。なにを怒つてるの？」

駅前のロータリーへと続く歩道橋を登り切つたところで広太は由美子の肩を捕らえ正面に回り込んだ。

「なにをつて。広太君、この結婚は御破算よ」

由美子は広太の手を払いのけ、堪えきれない怒りを

広太にぶつけた。

「どういうことだよ」

「どういうつて、だいたい広太君が派遣だったなんて聞いていないわ。派遣のお給料なんかでどうやって生活するのよ」

「だから、親と同居すれば家賃だつていらないし……」「同居だなんてとんでもない。絶対にいやよ。そのうえ病気のお兄さん付きだなんてとんでもない」「じやあ、どうすればいいんだよ」「どうもしないわよ。広太君との結婚をやめれば済むわ。婚約解消ね」

「いまさら冗談いわないでよ。母にどう説明すればいいのさ」

「お母さん？ 広太君はマザコン？ お義母さんも子離れしていられないわね」

「母の悪口はよせ」「お義母さんのことになるとむきになるのね。まさにマザコンね。最初から同居だと決めつけている」「しようがないだろ、朝兄のことだつてあるし」

「私は稼ぎのいい家政婦なの？ まつたく冗談じやない。精神病のお兄さんの面倒なんて何で私が。だいたい優秀なら三十にもなつて派遣つてことはないわよ。お兄さんだけじやなくお義母さんも頭がおかしいんじ

やないの？」

「母のことを悪く言うのはよせつて言つているだろ」

「綺麗な顔立ちで芯もしつかりですつて。強情そういうちにまたいらしてよね』よ。二度とお義母さんと会うことはないわよ」

「よせ、それ以上口にするな」

かろうじて保たれていた精神的な均衡が崩れたその瞬間、広太は由美子を力任せに突き飛ばした。由美子の体は宙を舞うように歩道橋の階段の踊り場に落ちてから歩道まで転がった。広太は直ぐさま階段を駆け降りて由美子を抱き起こそうとした。が、すでに息をしていないように思えた。広太の顔は青ざめ心臓は高鳴り足が震えた。ことの重大性におののき、何をどうすればいいのかわからなかつた。広太は由美子を放置し、遠巻きに見ていた数人の通行人を払いのけ一目散に逃げ帰つた。

「どうしたの？ 広太。顔がまつさおじやない」

佳子は、勢い良く応接間に飛び込んできた広太の様子に驚いた。

「やつぱり。由美子さんに婚約を破棄されたんでしょ。そらそろよ、由美子さんは上場企業の正社員よ。派遣

に同居、さらに精神病の朝兄付きじや誰だつて……。由美子さんにしてみれば結婚詐欺にあつたみたいなものよ」

「うるさい。黙れ」

広太は、今日という日のために佳子が活けた花を鷲掴みにして里香子の顔に投げつけた。

「なにをするのよ。本当のことじやない。もっと自分に釣り合つた人を相手にしない広兄が悪いのよ。お母さんに優秀なんて言われて鵜呑みしてからよ。だいたい社会に対する免疫がないのよ。朝兄も広兄も」

「うるさい、うるさい、うるさい」

広太は花の抜かれた花瓶を振り上げて里香子の額を割るかのように振り降ろした。広太の手にしていた花瓶は原型を崩して足元に落ちた。里香子は倒れこみ、痛みを押さえるかのように頭をかかえこんだ。指の隙間からは赤く熱い液体が漏れだしている。

「広太、なんてことを」

「倒れこんだ里香子に佳子は駆け寄つた。

「里香子、大丈夫。しつかりしなさい」

「もうどうなつたつていいんだ。由美子を歩道橋から突き落として死なせてしまつた。俺は殺人者なんだ」「どういうこと、なにがあつたの？殺人者つてなに」

佳子は目の前に起きていることと、歩道橋での出来事を結びつけ、取り乱すかのように広太の両肩に手を掛け激しく揺すつた。

「うるさい。みんな母さんのせいだ」

広太は佳子を力任せに振り払つた。佳子の体は赤く染まつた絨毯に倒れこんだ。広太は、応接間を出ると玄関脇に置いてある朝一のゴルフバックからドライバーを抜き取り、ヘッドカバーを投げ捨てながら再び応接間に戻つた。

「俺は、ちつとも優秀なんかじやないんだ。そんなこと子供の時からわかつっていたんだ。だけど母さんが、母さんが・・・」

鈍い音とともに鮮血が飛び散り、広太の体と応接間の壁を赤く染めた。再び佳子は絨毯に倒れ込み、頭から溢れだす分厚い血が広太の足元にからんだ。里香子は微かな意識のなかで、鬼畜と化した広太の姿を捕らえた。おぼろげな光景ではあつたが何が起きているのかは理解できた。必死に逃れようとする思いとは裏腹に動かない体。応接間に何度も放たれる鈍い音の根源が里香子にも振り降ろされた。すでに里香子にはうめき声さえ発するだけの力は残つていなかつた。

「広太のお嫁さん、もう一度みたいな」

朝哉が応接間に入ってきた。

「わお、綺麗。真っ赤な蝶々が壁に一杯とまつている。

広太の顔にも・・・。あつ、あつちにも」

朝哉には応接間に広がっている衝撃的な出来事を理解することができなかつた。定まることのない焦点が飛び散つた鮮血を捕らえ、自分の世界に陶酔している。「お母さんも里香子もそんなところで寝ていたらだめだよ」

朝哉は倒れている佳子の傍にひざまずき背中を揺すつた。新たに鈍い音が放たれた。これまでの幾つかの音よりも幾分大きな音にも思えた。

「広太。おまえ」

真っ赤に染まつた応接間にコンビニから帰つた朝一の受けた衝撃がそのまま声となつて響いた。広太が手にしているドライバーは朝一にも向けられた。

「やめないか。落ち着け、広太」

朝一は週刊誌を丸め応戦の構えをみせたが振り降ろされたドライバーは、頭こそ逃しはしたものの朝一の鎖骨を碎いた。広太はもう一撃とばかりにドライバーを振り上げたところを、駆けつけた数人の男たちによつて背後から取り押さえられた。歩道橋での出来事の通報を受けた所轄警察が、目撃証言から斧寺家に駆け

込んできたのだった。

由美子は歩道橋の階段から転げ落ちた際に後頭部を強打し、病院に搬送されたが救急治療の甲斐もなく、日付が変わろうという时刻に息を引き取つた。佳子、里香子、朝哉はいずれも脳挫傷で即死だつた。朝一は鎖骨骨折で二箇月の重傷となつた。

広太は現行犯逮捕され、取り調べを受けたあと検察庁へと送られた。新聞や週刊誌は獵奇な殺人事件として大きく取り上げた。そして、過保護な親に育てられたことによる社会生活に対する免疫の欠如の結果と報じる週刊誌もあつた。

「斧寺広太は、母親の溺愛がもたらした人格形成上の欠陥。つまり、パーソナリティ障害を発症していたと思われます。女性よりも男性に多く診られ百人に三人はこの兆候があるといわれています。アンチボディが形成されることなく大人になつてしまつたことの結果ともいえる。思い描いた結婚話がいとも簡単に破談となつたことで心に潜む至みの隙間が突如として裂かれて制御が効かなくなつてしまつたのでは……」

お昼のワイドショー番組で、無責任な評論家がわかつたかのように補足した。

広太は精神鑑定を受け、入念な取り調べのあと一審

で死刑判決を受けた。死刑制度反対の人権派弁護士によつて上告されたもののやはり控訴審でも死刑判決がくだされた。

「斧寺君。君のしでかしたことは裁かれなければならぬ。しかし、現代社会において死刑制度は間違つてゐる」
「弁護士、僕は判決を受け入れようと思つています」

刑が確定し、広太は収監された。朝一は病院を退院するとその日のうちに佳子と子供たちを弔つた。翌日には、古く小さなアパートにわずかばかりの荷物とともに住まいを移した。さらにその翌日、入院中に段取りを済ませておいた全ての資産を現金に変え、それを持つて由美子の両親に詫びた。

朝一は佳子たちの月命日には墓地に足を運び、広太に手紙を書いた。そして三箇月に一度は東京拘置所に広太を訪ね、他愛もない話に笑つた。朝一には子供たちとの幼いころの想い出となるような話はそれほど多くはない。決まって奥多摩湖のキャンプの話題が中心となつた。

「父さん。おれ、向こうに行つたら必ず由美子さんや母さんたちに謝るからね。許してはもらえないかも知れないけれど必ず謝るからね」

「そうだな。じゃあ、また来るからな」

二十分あまりの面会の最後は必ず広太が涙ぐんだ。

判決から十三年、朝一のもとに広太の刑が執行されたとの知らせが届いた。朝一は、遺骨を引き取ると弔いを済ませ佳子たちが眠る墓地に広太を埋葬した。

広太の四十九日をすませた朝一はアパートを引き払つた。その翌日、新聞の片隅に奥多摩湖で老人の溺死体が上がつたと小さく報じられた。

完